関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム
データスチュワード型人材育成プログラム
第 4 回 開催報告

2026 年 11 月 10 日（火）開催

1. 開催概要

行事名	関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム データスチュワード型人材育成プログラム 第 4 回
テーマ	人文学における研究データ管理：課題，実践，研究支援
日時	2026 年 11 月 10 日（火） 午前：ワークショップ／ 午後：国際シンポジウム 15:20〜18:30（閉会挨拶 18:30〜）
会場	グランフロント大阪 うめきた SHIP ホール
開催形式	午前：会員限定・非公開ワークショップ 午後：対面・オンラインのハイブリッド開催（日英同時通訳あり）
主催	関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム
共催	大阪大学大学院人文学研究科 人文学林 「デジタルヒューマニティーズを核とした人文学研究分野の創成」事業 ベルリン自由大学図書館
参加者	午前：34 名（うち受講者数 24 名）、 午後：110 名（現地 46 名（講師・スタッフを含む）、オンライン 64 名）
内容	11:30-13:30 Sibylle Söring 氏、Cosima Wagner 氏（University Library, Freie Universität Berlin）によるワークショップ 15:30-16:15　基調講演　永崎 研宣氏（一般財団法人人文情報学研究所） 16:15-16:25　休憩 16:25-17:45　パネリスト講演 Sibylle Söring 氏、Cosima Wagner 氏（University Library, Freie Universität Berlin） 安形 麻理氏（慶應義塾大学 文学部） 小風 綾乃氏（東京大学史料編纂所 前近代日本史情報国際センター） 17:45-18:00 休憩 18:00-18:30　パネルディスカッション「人文学における研究データ管理と研究支援」 パネリスト：永崎研宣氏，Sibylle Söring 氏，Cosima Wagner 氏，安形麻理氏，小風綾乃氏 進行：Nikolaos Voulgaris(大阪大学附属図書館研究開発室) 会終了後-19:30　意見交換会

2. 開催目的と概要

全 6 回で構成されるデータスチュワード型人材育成プログラムの第 4 回は、人文学、特にデジタル・ヒューマニティーズにおける研究データ管理と研究支援を扱った。史資料やその画像、翻刻、注釈、調査記録などを対象に、データの作成や解釈に関わる分野固有の知識と判断に着目した。日本とドイツの事例を通じて、こうした研究実践を踏まえたデータの管理・共有・公開・再利用と、それを支える人材・組織のあり方を検討した。

午前はコンソーシアム会員機関からの受講者限定のワークショップ、午後は一般参加者にも開かれた国際シンポジウムという構成で実施した。午後は、人文学データの再利用と研究基盤、大学図書館による RDM 支援、書誌学者のデータ共有、歴史史料の構造化を取り上げ、最後に登壇者によるパネルディスカッションを行った。

3. 講義・演習概要

ワークショップ

Freie Universität Berlin　Sibylle Söring 氏・Cosima Wagner 氏

進行：Nikolaos Voulgaris 氏、指導・助言：永崎研宣氏・安形麻理氏

プログラム受講生を対象に、人文学の研究データとその支援を考える非公開ワークショップを実施した。第 1 部「Research Data in Digital Humanities」では、FUB で作成された研究者へのインタビュー動画を題材としたグループディスカッションを、第 2 部「Supporting RDM in the Humanities」では、人文学研究者に対するサービスや支援の具体例を取り上げる構成とした。研究で扱うデータを具体的な事例から捉え、研究者の活動と支援サービスを結び付けて考える機会として位置付けた。なおディスカッション中に永崎氏、安形氏のコメントがあり、講師から提示されたテーマが人文学、特に写本に関する専門的なものであったため、永崎氏から受講者に対し背景や用語説明も行われた。

シンポジウム

開会挨拶　15:20〜15:30

大阪大学 D3 センター・コンソーシアム統括　甲斐 尚人氏

午後の国際シンポジウムは、大阪大学附属図書館研究開発室の神崎隼人氏が全体司会を務め、甲斐氏の開会挨拶で始まった。

基調講演 人文学研究における研究データ管理の課題と展望　15:30〜16:15

慶應義塾大学 文学部／一般財団法人人文情報学研究所　永崎 研宣氏

永崎氏は、多様な人文学データの長期的存続には、データの保存に加えて、効率的再利用が可能な形式と実際の再利用事例が必要であると論じた。人文学資料では、翻刻・校訂・注釈と研究者の判断が重なるという特徴がある。この特徴は TEI による構造化、日本・東アジアの資料に合わせたガイドライン整備、生成 AI を用いたデータ作成と人による検証と関連する。また、DARIAH や

CLARIN 等の欧州研究基盤からは、データやツールとともに専門知識を提供する体制の重要性が明らかになる。原資料との対応、処理・判断の履歴、不確実性、利用者が理解できる記述を残すことに加え、維持管理の仕事を評価し、担い手が継続して働ける制度と雇用を整える必要性がある。

人文学向けの RDM 支援におけるサービスパートナーとしての図書館　16:25〜17:05

Freie Universität Berlin　Sibylle Söring 氏・Cosima Wagner 氏

Söring 氏と Wagner 氏は、ベルリン自由大学図書館を事例に、研究者と協働する RDM 支援サービスを紹介した。同図書館では、中央の RDM チームによる個別・プロジェクト相談、DMP の作成・見直し、データの公開・ライセンス・保存に関する支援と、情報基盤部門等が連携している。さらに、分野担当のリエゾン・ライブラリアンが研究者との関係を築き、中央の RDM 専門家と共同で研修を行う体制が作られている。人文学・地域研究の支援では、センシティブな資料や差別的表現を含むメタデータ、多言語・非ラテン文字の扱いなど、分野の研究実践に即した論点がある。図書館が研究者と対等なパートナーとしてサービスを設計することと、支援を継続するための資金確保が課題となる。

書誌学者による書物からのデータ取得と信頼に基づく非公式な共有行動 17:05〜17:25

慶應義塾大学 文学部　安形 麻理氏

安形氏は、4 人の書誌学者に対する 5 件の半構造化インタビュー等をもとに、書物の現物から得られるデータの取得・記録・共有・再利用の実態を紹介した。紙や羊皮紙の質感、装飾、使用の痕跡など、二次元の画像や標準的な項目だけでは捉えにくい情報が、手書きの記録や写真、過去の調査の記憶と結び付けて解釈されていた。また、写真は信頼関係にある同僚や図書館員との個人的なネットワークを通じて共有され、助言や再利用につながっている。生データの公開へのためらいと、目録や解説を通じた学術的貢献への意欲という両義性がみられ、支援において研究者の暗黙的な判断や既存の共有慣行を理解する必要性がある。

歴史学の実践経験を活かした TEI 構造化　17:25〜17:45

東京大学 史料編纂所　小風 綾乃氏

小風氏は、歴史研究者でありかつ TEI データ構築者でもあるという両方の立場から、公開データの加工と史料集の構造化を紹介した。『大日本史料』の事例では、綱文、書誌、史料本文、編纂者の注記を区別し、判読の確信度や相互参照、人名の注記といった版面上の工夫をデータへ移す過程が説明された。編纂者の作業の流れを保ちながら、利用者が関連史料や辞典へたどり着けるようにするというのが仲介者の役割である。またパターン検出やスクリプト作成は AI が担う一方、構造の決定、標本による評価、史料の解釈は人が担うという分担が求められる。専門的判断を確認できる形で残すことが重要である。

パネルディスカッション 人文学における研究データ管理と研究支援　18:00〜18:30

進行：大阪大学 附属図書館研究開発室　Nikolaos Voulgaris 氏

永崎研宣氏、Sibylle Söring 氏、Cosima Wagner 氏、安形麻理氏、小風綾乃氏の 5 名が登壇し、「人文学における研究データ管理と研究支援」をテーマに、分野特有の課題や困難さ、望ましい支援等についてパネルディスカッションを行った。

閉会挨拶　18:30〜18:40

大阪大学人文学研究科人文学林　田畑 智司氏

パネルディスカッションの後、人文学研究科人文学林デジタルヒューマニティーズチームの田畑氏より閉会挨拶があり、当コンソーシアムと人文学林との連携に基づきシンポジウム企画や教材開発にご尽力いただいた故・吉賀夏子氏への追悼の言葉をふくめて締めくくられた。

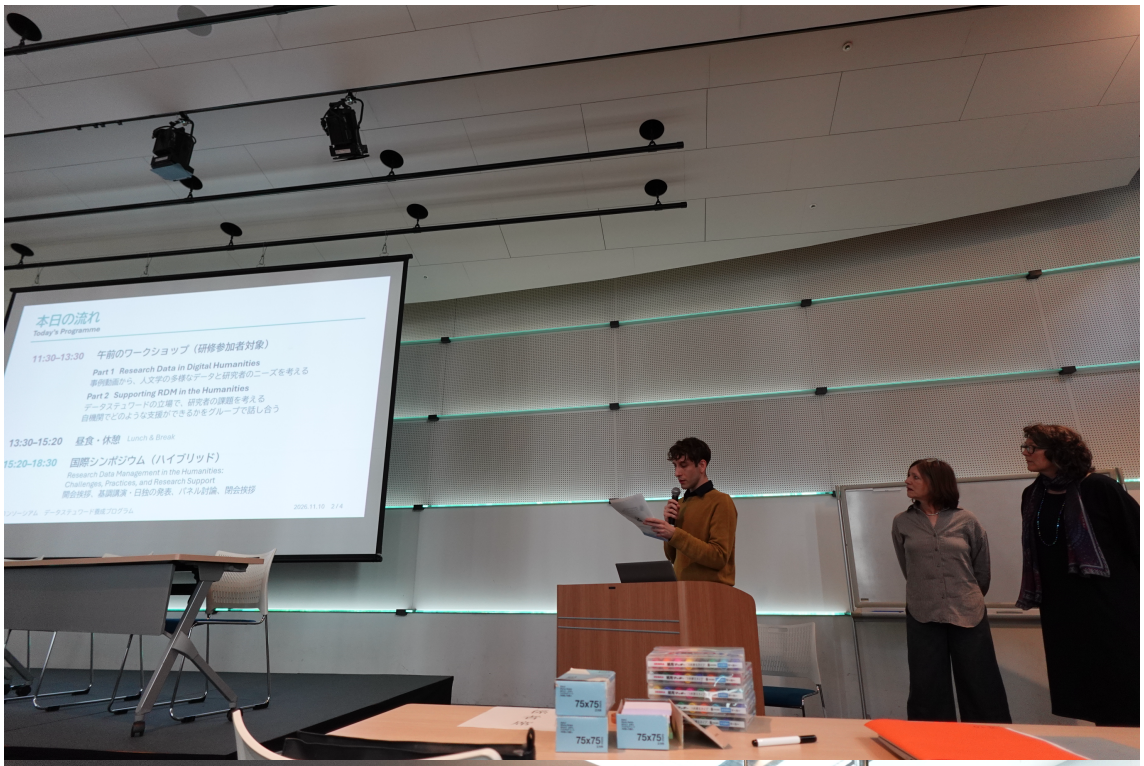
意見交換会　18:40〜19:30

参加者に講師 5 名を交え、会場にて引き続き質疑応答や意見交換が活発に行われた。

4. 第 4 回を通じて共有された視点

1. 人文学の研究データを理解するには、データの形式に加えて、史資料の物質的特徴、研究者の解釈や判断、信頼関係に基づく共有の慣行を捉える必要がある。
2. データの長期的な利用を支えるため、原資料との対応や処理・判断の履歴、不確実性を記録し、研究者コミュニティと協働して再利用可能な形式を整えなければならない。生成 AI を活用する場合にも、人による検証と判断の記録が重要となる。
3. データスチュワード型人材には、分野の研究実践を理解し、研究者と図書館、RDM 専門家、情報基盤等をつなぐ役割が求められる。その役割を持続させる条件として、専門知識を共有するネットワークと、継続的な職務・評価・資金の確保しなければならない。

作成：関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム事務局


本日の流れ
Today's Programme
11:30–13:30 午前のワークショップ（研修参加者対象）
Part 1 Research Data in Digital Humanities
Part 2 Supporting RDM in the Humanities
13:30–15:20 昼食・休憩 Lunch & Break
15:20–18:30 国際シンポジウム（ハイブリッド）
Research Data Management in the Humanities:
Challenges, Practices, and Research Support




中世写本研究者の実例
国際シンポジウム「人文学における研究データ管理：課題，実践，研究支援」
2026年11月10日
International Symposium on Humanities Research Data Management, 10 November 2026
人文学研究における
研究データ管理の課題と展望
Challenges and Prospects for Research Data Management in the Humanities
貯めるだけでは守れない：再利用される研究データへ
Long-term preservation depends on reuse.
永崎研宣
慶應義塾大学文学部教授／一般財団法人人文情報学研究所主席研究員／日本学術会議会員
Kiyonori Nagasaki, Professor at Keio University and member of the Science Council of Japan
CH.1 日本語
CH.2 ENGLISH




安形麻理 / Mari Agata
• 専門：西洋の書誌学、書物史
• 対象：グーテンベルク聖書などの初期刊本をデジタル画像と視野を使って分析
• Research background: Analytical Bibliography, History of the Book
• Focus: The Gutenberg Bible and other incunabula using digital images and material objects



